明治大学校友会　清瀬地域支部

MEIJI NEWS

第24号
2024.4.1

発行：明治大学校友会清瀬地域支部　発行責任者：永代　達三
編　集：広 報 部　　印　刷：㈲スガハラ印刷

台田運動公園の桜並木

令和六年度を迎えて

支部長　永代　達三（昭和48　政経）

今年は、元旦に起きた「能登半島地震」と羽田空港の滑走路上で日本航空機と海上保安庁の航空機同士が衝突した事故が起き、多くの方々が犠牲になるなど、お正月気分を吹き飛ばす厳しい年明けとなりました。昨年からコロナが落ち着き、日常生活が以前に戻りつつあり、海外からの観光客が大幅に増えるなど希望の見える年の始めとなるはずでした。

「能登半島地震」については二月末現在も安否不明の方がおられ、上下水道、道路、電気等のインフラも未だ整備されておらず、日常生活が平常に戻るには長期に亘る事と予想されています。今回の被害に遭われた方々に衷心よりお見舞い申し上げるとともに一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

明治大学校友会多摩支部清瀬地域支部は今年をコロナ明け元年と考え、会員相互の親睦、地域貢献を大きな活動の柱に、従来の活動をより一層活性化させ地域支部活動の充実を目指し、一人でも多くの会員の方に参加していただけるよう努力していく所存です。

また、新たな会員の獲得を目指していきたいと考えています。組織の活性化には欠かせません。特に女性、若手の会員の獲得は組織にとっては是非とも必要です。

今後、様々な活動を行っていきますので一人でも多くの方々の参加をお待ちしています。楽しい校友会活動を一緒にやりましょう。

校友の方々には北陸地方ご出身の方々がいらっしゃいます。
ご親戚の安全は確認されておられると思いますが改めてお見舞いを申し上げます。
（編集部）

令和五年度の事業活動報告について

清水　計明（昭53商）

今年度は、コロナ禍前の状態に戻りつつある中、令和五年度の校友会活動を振り返ってみたいと思います。

昨年の定時総会は、三年ぶりに対面総会を実施することができました。定例の月一回の懇談会は、八月、一月を除き開催し、校友会のイベント企画、ホームページの充実等に加えて、校友会の拡大と維持のためにどのようなことができるのかを真剣に話し合ってきました。また懇談会後の懇親会で親睦を深めてまいりました。

「紫紺句会」では、小中学校出前授業のサポーター協力を五月下旬から七月下旬まで校友五人で全授業の約半数をお手伝いし、地域貢献の一助として活動してまいりました。ホームページには毎月、特選句一句、個人句一句を掲載しております。また、篆刻教室は、校友の和田さんを師匠に発足二年目になり、十一月の清瀬市民文化祭に作品を出展することができました。

九月には「屋形船クルージング」を実施。好天に恵まれ一般市民二人を含め九人が参加し、屋形船で東京湾周遊を満喫しました。十一月の「多摩湖ウォーキング」には校友六人、一般市民十一人の総勢十七人全員が晩秋の多摩湖約八キロの道のりを完歩しました。十二月には、「ラグビー明早戦観戦」清瀬支部から校友二人が参加、一月には「野鳥観察会」が開催され、校友六人を含む総勢三十二人が青空のもと三十三種類の野鳥を確認しました。

そして、五月二十六日（日）には、清瀬地域支部の定時総会を予定しております。

多くの方々のご参加をお待ちしております。

全国校友愛知大会に参加して

永代　達三（昭48政経）

多摩支部の皆さんと

第五十八回「全国校友愛知大会」は昨年十一月十八日・十九日の二日間、「尾張にこにぁ三河においでん！明治いーじゃんひとつになろまい」をキャッチフレーズにコロナの影響もあり四年ぶりに実施されました。十八日に名古屋マリオネットアソシアホテルで前夜祭が、十九日に記念式典がウインクあいちで開催され、約八百人の校友が参集しました。私は十九日の記念式典に参加しました。

式典はＯＢ・ＯＧのアナウンサー司会で行われ、北野校友会長からは多摩支部の「メイトブック」の話も披露されました。柳谷理事長は大学財政の健全化や百四十周年記念事業について、大六野学長からは少子化の中の教学戦略が披露されました。来賓として、大村愛知県知事のビデオレターや、川村名古屋市長の挨拶があり、万歳三唱が行われ閉会となりました。休憩を挟み、本学校友の元中日ドラゴンズの川上憲伸氏から「我が野球人生」の記念講演が行われ、大いに会場が盛り上がりました。その後、ホテルに会場を移し懇親会が行われました。

満員の中、立食形式で行われました。愛知の特産物が会場の両脇に並び、名古屋おもてなし武将隊等のパフォーマンスが行われ、最後は応援団の指揮のもと参加者全員肩を組んで校歌斉唱で幕を閉じました。

多摩支部から、土屋支部長、江面幹事長他総勢七名が円卓を囲み和気藹々で楽しい一時を過しました。

私は息子が名古屋に住んでいることもあり、家内と息子宅に泊り、犬山城、名古屋城、伊勢神宮など中京地区観光の二泊三日間でした。

明早戦ラグビー観戦記

清水　計明（昭53商）

清瀬駅で気賀沢さんと待合せ、近くのコンビニで飲み物等仕入れ、いざ国立競技場へ向かった。

雲一つない青空の中、百周年を迎えた伝統の明早戦が始まった。明大の前半は、危なげない展開であった。ＦＷのＷの縦攻撃のイメージがあったが、この日はＦＷとバックスの連携が良く、ほとんどボールを支配し敵陣で攻撃する時間が長かった。前半は明大ペースで二十七対三と早大をノートライに抑えた。周りの校友も余裕で見ていた。後半が始まり、一時は三十八点差までリードを広げたが、二十一分頃からは早大は横幅を大きく使った展開で、ビックゲインを量産され五トライを挙げられ、八点差まで迫られた。ロスタイムで二トライを奪い、結果五十八対三十八で試合終了となった。早大が大差にもかかわらず、試合をあきらめなかったのは敵ながらさすがであった。今後も切磋琢磨して良きライバルとして感動的な試合を見せて欲しいと思いました。

初代支部長粕谷彌太郎様を偲んで

中村　曠（昭36政経）

故　粕谷彌太郎氏

粕谷彌太郎様は清瀬地域支部の設立に尽力、設立と同時に初代支部長に就任し、清瀬地域支部の発展に貢献されました。

会員の親睦と地域社会貢献を目標に、毎月開催の懇談会、新年会、忘年会など会員の親睦交流を進め、地域社会貢献の一環として「石田波郷俳句大会」に協力支援。イベント活動では「多摩湖ウォーキング」「東京湾クルーズ」など実施しました。更に会員向け「会報」を創刊、「ホームページ」開設など支部活動の基礎を創られました。

設立五周年記念には市内小学校、市民団体第九合唱団と母校グリークラブ、同OB会合唱団駿河台倶楽部による音楽会は「清瀬けやきホール」を沸かせ、今も忘れることができません。温厚、誠実で優しいお人柄は誰からも慕われる偉大な先輩でした。これまでいただいたご指導、ご支援を深謝し、心よりご冥福をお祈り申しあげます。（合掌）

「清瀬紫紺句会」の句集最新号に粕谷様を偲び、お別れの句が供えられました。

巨星落つ胸に沸き立つ波の花

校友訪問　④

市民文化祭初参加の巻

（紫紺会篆刻部会　梅狸庵てん刻教室主宰）

和田　寿文（昭49法）

昨年十一月四日・五日の両日、清瀬駅前のアミューでの『第六十一回市民文化祭』に参加しました。

出展は校友から清水さん、中村さん、粕川さんと和田が、ほかに校友外の四名の女性の方々計八名です。

うどん打ち自慢の清水さんの作品は『清風庵』自分のうどん打ち道場を持てることを願って。

（道場オープンしたら食べに行きまぁ～す！）

『寿齢讃歌』と彫ったのは中村さん、元気で今を迎えられたことを喜んで。

（なお一層健康に留意して人生楽しんでくださいね）

粕川さんは『炎暑』「今年の漢字」、なんと言ってもこれ！

（清水寺では「税」、ここ清瀬では当然「炎暑！」）

人生楽しむもの勝ち！

『従吾所好』こころの欲するままにと解釈して彫ったのは和田、人生楽しもう。

（頭かちかちのおやじにならぬよう！）

校友外の方々は水墨画を添えて、『魚楽』『楽』『春花秋月』『為者常成、行者常至』『寿』…、といずれも力作揃い。

市長と文化協会長揃っての視察では、「いいですね。素晴らしい。」の連発。もっとも市長としては次の選挙もあるしあの手この手の誉め言葉を並べて…（おっと失言笑い）。全くの未経験者が一～二年でよくぞここまで…と感心しきりの姿に、誉め言葉もあながちお世辞ともいいきれないと確信。

篆刻は印材（石）に印刀で文字を彫り、それを押印したものを楽しむ書道の一分野です。日本画や書作品の隅に押してあるハンコみたいなもの、といえば分かりやすいでしょうか。言葉を調べたり、漢字を探したり、手先を使ったりと頭と手先の健康にもなりで結構楽しい時間です。皆様も『従吾所好』の世界へ。（写真は粕川提供）

和田さんと中村さん

アミュー入口

皆さんの力作

エッセイふるさとシリーズ　⑮

高校同期会に参加して

西尾　修一（昭44政経）

昨年六月に関東に集う高校時代の仲間二十数名で「新宿中村屋」で久し振りの同期会がありました。コロナの影響で三年ぶりの開催でしたが人生での区切りの喜寿の年とあって関西地方のメンバーと合同で秋にもう一度集まろうという事となりました。

十月二十五日に集まりやすい京都駅ビルの「がんこ寿司」で四十二名が集まりました。関西のメンバーは高校卒業以来の人も多く名前と顔が一致

京都での同期会

するのはせいぜい一割か二割でしたが徐々に和やかな雰囲気となり有意義な一日を過ごすことができました。

私は小・中・高と福井県の小浜市で過ごしましたが高校は若狭高等学校で学びました。この高校は「**縦割りホームルーム制**」という全国的に見てもユニークなシステムを取り入れた大変オモシロイ学校で　昭和二十四年に新制高校として発足し戦後教育の理念「異質なものに対する理解と寛容」が掲げられました。その核としてホームルーム制度が設けられました。

この制度とは普通科・商業科・家庭科・被服科の四科と三学年の男女生徒でそれぞれが構成され、まさに個人としてみれば異質なメンバーが混在していました。授業を受けるときには教科書、筆記用具をもって移動し昼食はホームに戻り校内行事等の話し合いがありました。ホームにはアドバイザーと呼ばれた担任もいました。このホームの数はベビーブーム等入学生の増加に応じて三十から五十と増減を繰り返しながら平成六年三月まで四十五年間続きました。戦後に全国の多くの高校で取り入れられ制度で最後まで守り通したのは奇跡だとされています。昨今の混沌とした格差の時代では、「異質なものに対する理解と寛容」は思い起こされます。

若狭高校前校長の著作
「異質なものに対する理解と寛容」

東京湾クルーズシリーズ

屋形船で隅田川下り

穴田　作道（昭38政経）

恒例の東京湾クルージングの一環として昨年九月二十五日（月）、屋形船による隅田川下りを実施しました。

いざ！出発

参加は九名（校友七名、一般市民二名）。当日、校友の方で体調不良のため急遽取りやめた方が二名おり、早い回復を願っての出発でした。

晴天に恵まれ絶好の船遊びとなる予定でしたが、思わぬ事態に・・・。浅草・吾妻橋の乗船場所が分かりません。三十分のドタバタ劇の末、判明したという予想外の出来事がありました。

船出は、東京スカイツリーの隅田公園脇のテラスで、ここから、それぞれ個性を持った十を超える橋をくぐり台場海浜公園までの往復コースです。

隅田川は水量が多く、橋げたすれすれの航行場所もありました。水上バイクや外国人を多く乗せた観光船などとすれ違います。両岸には神田川、小名木川や日本橋川などの合流点ほか運河や水門などがあります。隅田川と小名木川との合流地点には、二つの川を見守るように、時間になると九十度動く芭蕉像のある芭蕉記念館が見えます。永代橋を通過すると、周囲の景色が一変します。正面に佃島を代表する司祭帽子を被ったような高層マンション三棟、その背後には数多くのビル・マンション群が・・・。東京の臨海部を象徴する眺望です。先の東京オリンピック選手村を過ぎ、右側に竹芝桟橋があり二隻の船が停泊しています。が、その先に東京タワーが見えません。高層ビルの陰に入っているようです。

レインボーブリッジを通過し、フジテレビ前のお台場海浜公園が屋形船の係留地点ということで錨を下しました。屋形船は、我々の貸し切り。食事、飲み放題、カラオケ付の謳い文句。乗船後、既に飲食が進んでいるうえに、船の揺れも加わり、絶好のカラオケ時間となりました。また、揚げたての天ぷらの配膳です。海浜公園では、女性が漕ぐ「サップ」が見え、ユリカモメが泳ぎ、海鵜が羽を休めるなど、ゆったりとした時間が過ぎていきます。およそ三十分後出発。遡上の風情は、下りと全く異なった隅田川を見せてくれます。西日を受けた勝鬨橋は往時の威容そのまま、船上ならではの一景です。到着直前の船着き場で船頭さんに促され、貴重な写真を撮ることができました。ゴールドのアサヒビール社屋壁面にスカイツリーが黄金色に映っています。二時間半の最後を飾る感動でした。

この後はカラオケ大会

まずは乾杯！

第十一回多摩湖ウォーキングを実施

福島　寛（昭37政経）

中間地点の時計台で記念写真

昨年十一月二十五日（土）十一回目となる多摩湖ウオーキングを実施しました。距離は約八kmの多摩湖半周のコースです。今回の参加人数は明大校友会清瀬地域支部から六名「市報きよせ」の呼びかけによりお集まり頂いた、市内在住十一名の合計十七名で実施されました。永代支部長の挨拶の後、十時にスタートです。幸い好天にも恵まれました。今回は過去十回のコースとは異なる反対側の半周のウオーキングです。スタート時参加者にアメ玉が配られ、ここで一句！

「多摩ウオークアメ玉口に紅葉かな」

赤や黄色の紅葉を見ながら落ち葉のさくさくとした心地良い音を踏みしめながら歩みを進めました。特に歩道まで飛び出している真っ赤な紅葉は素晴らしい目の保養です。途中、参加者の女性から道路沿いに咲いている花や実の質問が出ると校友の福本さんの出番です。それに対し丁寧な説明がなされていました。歩道も綺麗に整備されているので、マラソンランナーや自転車が激しく行き去ります。特に自転車はかなりのスピードで、その都度「自転車が来ますよ」と声を掛け合います。途中、中央大橋を渡っていると、我々の明治の紫紺旗を見て二人のOBが声をかけて来ました。紫紺旗の威力は絶大ですね。中央大橋を渡り終えると、もうすぐ終点です。右に西武遊園地の観覧車を見ながら進むと、まもなく西武球場のドームが見えて来ます。ドームの屋根を見ながら進み、無事に出発地の駅に戻ることが出来ました。皆さん心地良い疲れを感じたことと思います。ウオーキング後は恒例の清瀬駅南口の「松庵そば店」に行き「お疲れさん会」です。今回は校友と市内の方を含めて十名で昼食を取り、散会しました。参加者の皆さん、大変お疲れさまでした。

西武球場駅前で記念写真

金山緑地公園野鳥観察会

中村　曠（昭36政経）

今年の「野鳥観察会」は一月二十七日（土）金山緑地公園で催されました。校友六人と多摩湖ウォーキング常連の市民三人が参加しました。野鳥観察会は市民団体の「清瀬の自然を守る会」が毎年開催しており、清瀬地域支部の年間事業活動の一つです。早速、池の中に鴨二羽を発見、熊笹の小道を行くと波のうねりのように飛ぶ「ヒヨドリ」、サザンカの蜜を吸い、授粉の役割をする「ムクドリ」。太陽の眩しい柳瀬川側道に出ると川面に「ハクセキレイ」、樹木には「メジロ」が飛び回り、湿地帯では枯れた「葦」の群生地に「葦の実」を啄む「シジュウカラ」が飛び交っていました。調節池は湧き水を利用した観賞池と小さな島があり、この島に、小魚を狙う「カワセミ」が生息しております。湧水は池に一年を通しきれいな水を供給し冬も凍りません。冬の夜明けには池に霧が立ち込め、幻想的な世界が出現します。小島には「ダイサギ」のほか「アオサギ」「コサギ」「ゴイサギ」等、池には頭部の白い「オオバン」や「マガモ」「カルガモ」、潜水の名人で泳ぎの早い「カイツブリ」は愛嬌たっぷりです。池を囲む湿地帯の林に「カワラヒワ」「シメ」が見られました。散会後、校友有志は清瀬駅南口の蕎麦処で親睦ランチ会を楽しみました。

野鳥観察会参加の皆さん

ダイサギとマガモ

アオサギ

フォト・エッセーシリーズ⑬

粕川　偉三男（昭48政経）

今年も元気で

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ
夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ嗔ラズ
イツモ
シズカニワラッテイル

宮澤賢治

華の舞で新年会

【特別寄稿】

大橋治三先生のこと　（三）

佐藤　房夫（昭39 工）

庭園写真の仕事を一通り終えた大橋先生は、二科会写真部の運営にたずさわり、審査委員や広報委員長として活躍された。「二科会埼玉支部」の支部長として会員の指導をし、また本部役員として各地の支部に出向き写真の指導をした。二科会の応募が近づくと、提出作品にたいするアドバイスを求めて、多くのアマチュア写真家が集まった。そのかたわら各地のカルチャー教室の写真講師として、初心者指導にもあたった。私が大橋先生に出会ったのはこのカルチャー教室であった。たまたま新聞に入っていたチラシで所沢にあるカルチャー教室の写真講座が目にとまり、入会したのが先生とご縁の始まりであった。月一回の大橋先生の講座はユニークなものであった。受講生がリバーサルフィルムで撮影した作品を、10～20枚スライド写真にし、プロジェクターで投影した作品を先生が講評する。「この写真はあかん」、「この写真もあかん」と大阪弁で言うのが口癖である。「どこに感動したのかもっとわかるようにアップで撮れ」とか「美しさを感じたのはどんな処のどんな美しさなのか」と指摘されました。またこの指摘は俳句にも通ずる言葉でもある。

大橋治三先生（前列右）左は大竹省二氏

技術的、学問的話はいっさいなかった。先生は写真専門学校に行ったこともなく、理論家でもなく、独学と現場で覚えた職人であった。先生は自分の職業を自称する際、決して写真家とは言わず、「写真屋の大橋です」と名乗る。大阪気質が抜けない浪花男、職人気質を持った男であった。また先生は無類の酒飲みであり、講座が終わるとかならず生徒を誘い近くの居酒屋で雑談をした。先生は日本庭園について語ることはなく、自慢話もされなかった。

こうして先生との交流が始まった。次第に写真の技術云々より、先生の生きざまと人柄に魅せられた。

先生は平成八年銀座コダックサロンで「日本の庭」の個展を開催した。早速見に行ったが、画面全体にピントの合った静寂な庭の写真で、その迫力に圧倒された。大判カメラの威力もあったと思う。何枚かの写真に「○○万円売約済み」の札が貼ってあったことが驚きであった。平成九年写真集「往時茫茫」（クレオ社）を出版した。戦後の大阪付近の景色やスナップのモノクロ写真集である。十一月数寄屋橋ニュートーキョウを借り切り盛大な出版記念パーティーに私も参加させてもらったが、二科会の方以外にも写真界の錚々たる方々がお祝いに来られた。有名な方を目の前にして驚くばかりであった。

先生は平成十年「カメラ撮影テクニック（JTB）」を出版した。この本で参考例として私の写真が数葉掲載されたのも良き思い出である。

佐藤さんの写真が作例として掲載されています

講座だけでは満足できず、受講生の有志で大橋先生を主宰とするフォトサークルを立ち上げて、月一回の例会と撮影会を行った。また先生主宰の別のフォトサークルにも参加した。先生は渋谷東急のカルチャー教室でも講師をされていて、帰りに新宿歌舞伎町のゴールデン街の先生行きつけの店に連れて行かれたこともあった。狭いバーにはいろいろな職業の粋人達が集まり、サラリーマンが出入りする店とは違う雰囲気であった。そんな付き合いでいつの間にか、私は五箇所の写真クラブに所属していた。さすがに仕事の関係と、出費も重なり悩み始めた。そんな時突然会社から石川県の会社へ転勤命令があった。これを機にすべての写真クラブを退会した。

五年後、再び先生のカルチャー教室に入会したが間もなく、先生は脳梗塞で倒れ、懸命のリハビリで一時復帰したが、再び発症し、いくつか転院を繰り返しているうちに、いつしか音信不通になってしまった。その後私自身の退職もあり、次第に写真から足が遠くなった。またこの時期、カメラはフィルムからデジタルになり、デジタルカメラの機材をそろえる意欲も失せた。

ここ三年間に中学時代の恩師、大学時代のゼミの恩師が他界された。大橋先生もご存命であれば九十六歳となっている筈である。つくづく時の流れの速いことを実感している昨今である。（完）

撮影は大橋治三さん

飲み屋街

石田波郷俳句大会報告

関根　文子（平４短法）

第十五回石田波郷俳句大会は、昨年十一月二十六日(日)にアミューホールで開催されました。

私は今年度より実行委員を務めさせていただいていますがまだ名ばかりで、会場では昨年度と同様に柾谷さんに教えてもらいながら受賞者を送り出すお手伝いをしました。

満席のジュニアの部表彰式会場

今回のジュニア作品には東京都神津島の生徒さんが多く受賞していて、全国様々な所から参加されていることに改めて驚かされました。受賞作は神津島ならではの情景を思い浮かぶような作品ばかりで、五・七・五と言葉は短くても俳句の表現の豊かさを実感しました。

午前の授賞式は小学校一年生から中学校三年生まで集まりましたが、小学校低学年の子供たちは自分の名前が呼ばれると大きな声で「ハイ!」と返事していたものの、その後、席へ戻り時間が経つとともに何だかモゾモゾ・・・飽きてきたかなと、私は傍で「ガンバレガンバレ」と微笑ましく見ていました。一方、中学生にもなるとすっかり落ち着いていてこちらが色々言わずとも堂々と賞状を受け取っていました。

午後の新人賞の授賞式では佐藤郁良先生の講演がありました。開成高校俳句部が俳句甲子園に出場するまでの経緯や、そのために生徒たちとどのように取り組んでいったかをお話しされていました。とても興味深いお話でした。授賞式の後には懇親会が開催されました。若い受賞者同士で会話が弾んでいる様子を見て、俳句に対して勝手なイメージがありましたのでとても新鮮な気持ちになりました。私は川戸さん（副会長）、実行委員の西田さん、スガハラ印刷さんなどなかなかお会いできない方々から大会開催の大変さをお伺いしたりしていました。

帰り際に大山先生から第十五回大会記念創作和菓子をいただきました。葛の花と柿の句に因んだ和菓子でとても華やかで素敵でした。今後も微力ながらご協力したいと思っております。

紫紺句会活動報告

柾谷　榮吾（昭46法）

ついに第百回紫紺句会！！　二〇一四年（平成二十六年）六月に発足した紫紺句会が、本年二月九日の句会をもって第百回を迎えました。思えば明治大学校友会清瀬地域支部が発足して二年後、校友会活動の一つとして、校友会役員が中心になって俳句同好会を立ち上げ、校友の大山恭子氏（俳号細見逍子氏）に指導をお願いし快く引き受けてもらい、短冊による投句、清記、選句、披講、名乗りなどの句会の基本を学びながらスタートしました。俳句同好会は第十回句会（平成二十七年四月）からは「紫紺句会」に改称しました。

コロナ禍で会場が使えずに休会を余儀なくされた期間もありましたが、句会は常時十人以上の参加者で盛会です。毎回、細見先生の優しくも厳しい指導を受け俳句の奥深さを知りながら切磋琢磨しています。先生の添削を受けて会員一同少しずつ前進しているように感じます。

紫紺句会で初めて俳句を始めたのに、すでに俳人と呼べるレベルの人もいます。

紫紺句会の活動で特筆すべきは、清瀬市で二〇〇九年に始まった石田波郷俳句大会の支援があります。校友会発足以来、地域貢献活動として大会当日の運営や、応募俳句のパソコン入力作業、市内小中学校の俳句出前授業のサポーターとして校友の有志が協力しており、今では大会の重要な役割を紫紺句会が担っていると言えます。

記念すべき第百回の句会では、先生に秀句三句を選んでいただき賞品を贈呈しました。ご紹介します。

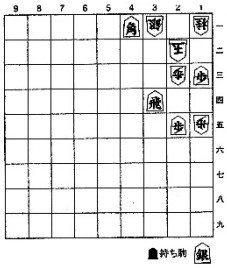
第一席　病室の食後の寝息梅一枝　　杉山　陽一
第二席　奥能登の地割れの里や梅真白　　佐藤　房夫
第三席　鰤起し氷見の漁師の高鼾　　穴田　作道

俳句は脳の老化を防ぐ効果があるそうです。高齢者の多い句会ですが俳句という知的活動を通して若さを維持したいものです。句会後の反省会兼懇親会はいつも和気藹々盛り上がっています。いつまでも楽しい句会が継続することを願っています。

表彰式の様子。
上から杉山さん、佐藤さん、穴田さん。

チャレンジ！

詰将棋（五手詰）　解答は次頁



【紫紺俳壇】

紫紺句会指導　俳句結社「隗」　主宰　細見　遵子

地震の町失せて山茶花ただ赤し

紫紺句会

大寒やベルトの穴を引き算す　穴田　作道
注連飾風に負けずに家の顔　永代　達三
亡き母の繕ひ手止む掘炬燵　粕川偉三男
どんど焼白みつつ食む焼き団子　小林　信夫
初夢や妻も子供も若かりし　佐藤　房夫
轍道子に支へられ初詣　島崎　光
米作り今年最後と故郷（さと）の母　杉山　陽一
厳寒の海原割るや能登地震　中村　曠
初便りテレビはどこも能登の海　西尾　修一
定席のひとつ欠けたる初稽古　柾谷　榮吾
混沌を静かに照らす中天の月　村野　良明
引き締まる少年の顔初日の出　山尾久美子

詰将棋解答

3三銀　△1三玉
1四飛　△同　玉
2四銀成　まで5手詰

ポスター
パンフレット
会誌・自分誌など

環境にやさしい
㈲スガハラ印刷
〒204-0022
東京都清瀬市松山 2-7-14
TEL 042-492-2210
FAX 042-491-8118
E-mail：
sugahara@sugahara-p.co.jp

篆刻を楽しみま書

「てんこく」は書道芸術の一分野です
頭と手先、フル回転の楽しみ！
「梅狸庵篆刻教室（和田素洞）」
『教室』清瀬駅南口すぐ
『日時』毎月中旬の水曜日午前
和田　寿文（S49法）
bairian510195@gmail.com
042-495-3349
初心者大歓迎、
お気軽にお問合せを

NPO法人

健康遊技たんぽぽ

○健康麻雀
午前の部　10:00～13:00　500円
午後の部　13:30～16:30　500円
一日の部　10:00～16:30　1,000円
＊入会金…1,000円
＊年会費…2,000円
☆セットのお客さま大歓迎（要予約）
清瀬駅南口から徒歩1分
清瀬市松山1-11-17 杉田ビル2階
☎042-495-7708

◎清瀬地域支部の情報は
校友会清瀬のホームページ
https://meiji-3.jimdofree.com/

ご意見・ご要望をお知らせください！皆様の会報として地域の情報など、どしどしお知らせください。
編集部一同
連絡先：粕川偉三男
ik4814@jcom.home.ne.jp

みんなの情報コーナー

・第12回定時総会
令和6年5月26日(日)
場所：アミュー
時間：13時～
・紫紺句会（随時会員募集中）
開催日：毎月第二金曜日　13時～
会　場：アミュー6階
・篆刻教室（随時会員募集中）
開催日：毎月第二水曜日　10時～
会　場：アミュー6階
*両教室とも見学大歓迎
*お問い合わせは編集部　粕川まで

訃報

故　粕谷彌太郎　様（昭二十八年　政経）
昨年十月二十七日に逝去されました（享年九十三歳）
ご生前の功績を偲び謹んで哀悼の意を表します